

# 日本の風景と未来の設計

アーバンデザイナー／東京大学教授  
北沢 猛



北沢 猛 (きたざわ たける)  
アーバンデザイナー／東京大学教授  
(新領域創成科学研究科空間計画学)  
UDCK アーバンデザイナーセンター長  
/横浜市・京都府・千葉県参与

## 楽しいという空間感覚

豊かさとはいかなるものであろうか。

ものによる豊かさを超える価値、言わば生き方の模索、そして生きる場としての都市や町のあり方の模索が続いているのが現代である。まず、ものの豊かさとは何であったか、その評価が必要であろう。一つの世代が使う消費財は豊富にあり、資源の浪費がまさに問題となっている。逆に、多くの世代が使う広い意味での公共財(道路や公園から本来の住宅や建築、町並み、風景、自然あるいは公的なサービスそして地域社会、都市社会)はどうであろうか。豊かとは評価できないであろうし、むしろ次の世代の負担となるものが多い。使いこなし楽しむことができる遺産をどれだけ豊かなものに転換できるかが求められている。

景観法が成立して、生活に視点から町や都市を見ること、そして人間という視点から空間を見直すことが定着してきたことで、政府の施策も大きな転換が図られる期待がある。しかし、一方では経済成長率がいまだに政府の道標であり政策目標であることは変わりなく、道具であるはずの市場経済が目的として語られるのが日本である。

豊かさを図るのは楽しいという感覚ではないかと考えるようになった。空間という風景や自然に感じ、人間として家族や仲間そして地域や組織に、仕事や文化など社会的活動にも楽しいという感覚が生まれる。

私は1977年に横浜市のアーバンデザインチームに加わった。当時はまだ開発の圧力も強く、政治的にも厳しい局面ばかりだったが、計画や市民参加、広くネットワークを組み立てる過程で私自身もおそらく周りにも楽しいという感覚が生まれた。そこにいい空間が生まれたのである。

1997年に東京大学に活動拠点を移し研究フィールドを探して岩手県大野村(現:洋野町)や福島県喜多方市など小さな村や町に長くかかわってきた。いずれも人口減少と高齢化や産業停滞が深刻で、そこに桃源郷はないが思わぬ地域の力を見いだしてきた。

小さな地域の力は、ブータン王国での集落調査から得た実感でもあった。この小国の国家目標は『国民総幸福度は、国民総生産よりも重要である。』(GNH *Gross National Happiness is more important than GNP*)。1976年12月、第5回非同盟国会議の記者会見でブータン国王が宣言したことで知られている。

標高3000mを超える急峻な地形の尾根に点在する村、車を降り数時間も歩く村、ヒマラヤに続く山並みと棚田に囲まれた美しい村。道路や電気など基盤は充分とは言

えないが、学校教育は無料かつすべて英語でという徹底した人材育成、新しい国づくりがゆっくりと着実に自分たちの文化と時間の中で進んでいる。

時間をかける発展。自然、農、食文化や芸能そして仏教の教えが支える開放的な共同体はしっかりと持続している。幸福のエンジンは生活を楽しむ村人や子供たちの姿である。その楽しいと感ずる空間がそこにはある。時間にとって普遍的な価値と人間にとって個別的な価値を持つ空間がそこにはある。信頼できる地域空間、そして風景がそこには広がっている。2005年のブータン初の国勢調査で、幸せかの問いに9割以上が幸せと答えたと言き、なるほど。

## 都市空間の指標

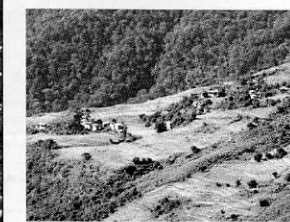
世界幸福度マップ(World Map of Happiness 2006 英国レスター大学社会心理学者 Adrian G. White) が初めて世界の178カ国を評価した。世界1位はデンマーク、2位スイス、3位オーストリア、4位アイスランド、5位パナマ、6位フィンランド、7位スウェーデン。アジアからは、先のブータンが8位に入っている。日本は、中国よりも下



ブータンの集落(ルクブジ村)



カーサ村の家と路地



ブータンの集落と棚田

